

## C. 国際宗教改革博物館及びサン・ピエール大聖堂

### 1. はじめに・・・宗教改革について

宗教改革とは、16世紀に西ヨーロッパで起こったキリスト教会における「道徳的、神学的、教会制度的改革運動」であり、ドイツのマルティン・ルターの「九十五箇条の提題」（1517年）から始まる宗教改革運動である。ルターは「宗教改革の三大原理」として、①信仰のみ（内容原理）、②聖書のみ（形式原理）、③万人祭司主義（神の前における人間の平等）を主張した。宗教改革運動は、活版印刷術の発明もあって爆発的に普及し、キリスト教世界をカトリックとプロテスタントに二分したことにより、社会と政治にも大きな変動をもたらした。ジュネーヴではジャン・カルヴァンを中心に宗教改革運動が進められた。

### 2. 国際宗教改革博物館

現在、国際宗教改革博物館となっている「ラ・メゾン・マレ」は16世紀にジェデオン・マレによって建てられた邸宅であり、1536年5月に宗教改革が宣言された、まさにその場所である。一方、サン・ピエール大聖堂は、カルヴァンが本拠とした教会であり、国際宗教改革博物館は、このサン・ピエール大聖堂に隣接し、宗教改革の歴史を現在の私たちに伝えている。この報告では、「宗教改革の三大原理」に特に注目してまとめることとする。

まず、博物館全体のなかでも、上述の「宗教改革の三大原理」のうち、①信仰のみ（内容原理）と、②聖書のみ（形式原理）について解説した、カルヴァンらが会議した部屋が印象に残った。そこでは、カルヴァンらプロテスタントの中心人物が内容原理や形式原理について熱心に議論する会話を



聞くことができた。具体的には、行い(免罪符の購入や寄進などの善行)を信仰の上位に位置づけるカトリック教会の姿勢や、牧師が聖書に自らの解釈を付け加えてしまうことなどについての議論である。

また、博物館ではフランス語に訳された聖書や賛美歌を見たり音声で聴くこともできた。当時、一般に聖書はラテン語で書かれていたため、農民などは聖書原本に書かれている内容を詳しく知ることができなかった。それを利用してカトリック教会が都合よく聖書を解釈し、宗教活動をしている、とカルヴァンらプロテスタントは批判していた。そのため、プロテスタントは、それらを多くの人が読めるフランス語に訳し、活版印刷術の発明もあってプロテスタントの思想を広く普及させた背景を見て取ることができた。

「宗教改革の三大原理」の万人祭司主義として印象に残ったのが、プロテスタントの礼拝の絵画である。当時は階級社会だったため、カトリック教会は司祭を前にして、司祭に向かって礼拝するのが普通であったが、プロテスタントは司祭を中心にして、司祭を囲むように礼拝をする。そこに階級差別はなく、男も女も赤子も司祭を囲むように描かれている。プロテスタントの「神の前における人間の平等」といった精神が非常に分かりやすく表現されているように感じた。サン・ピエール大聖堂でも、説教壇が中心にあり、説教壇に向かってベンチが配置されていた。

### 3. サン・ピエール大聖堂

サン・ピエール大聖堂は、もともとカトリックの教会であったが、後にプロテスタントの様式に改築されている。大聖堂は何度も増改築され、様々な建築様式が混ざりあった建物となっている。また、プロテスタントの教会らしく、豪華な絵画や派手なステンドグラスは存在していなかった。そして、カルヴァンが30年近く説教をした教会でもあり、カルヴァンの実際に座った椅子も展示されている。質素な椅子であり、豪華さはどこにもなかった。カルヴァンが説教した説教壇は教会の中央にあり、司祭を囲むように礼拝するプロテスタントの様式が見て取れた。また、サン・ピエール教会の塔は登ることができる。塔の螺旋階段はとても狭く、登る人と降りる人が同時には通行できないほどであった。塔の最上階からはジュネーヴの街が一望でき、新市街、旧市街、レマン湖全てを見渡すことが出来た。永世中立国としてのイメージがあるスイスもサン・ピエール大聖堂が出来た頃は、周辺国との戦いがあった



ので、街を一望する場所が必要だったのだろうかと思った。

また、地下は考古学資料館となっていて、ローマ帝国時代の遺構が眠っており、ローマ帝国末期のモザイク細工の床や、当時の有力者の墓などを見ることが出来た。遺構をそのまま考古学資料館として使用しているが、見学するルートはきちんと舗装されており、特に不便は感じなかった。私はローマといえばイタリアを連想してしまうが、当時のローマ帝国の権力や領土の広さを改めて感じる事が出来た。



#### 4. スイス研修を終えて

初の海外訪問で、期待と不安を抱えながらスイスを訪れたが、先生方の支えもあって大きなトラブルもなく無事に研修を終えることが出来て、今はホッとしている。ジュネーヴの歴史やスイスの国際社会への携わり方を学ぶことが出来て、とてもいい経験をする事が出来た。だが、お店での買い物は簡単な英語で十分であったが、ホテルのチェックインなどは先生方におんぶに抱っこになってしまったため、英語力の必要性を一層感じる事となった。今後はより一層国際社会へ目を向け、国際社会の一員としての意識を高く持って残り少ない学生生活を送りたい。

(橋本 淳史／法学部4年生)

